

## 【D年】復活節第4主日(2024年4月21日)

## 【旧約聖書日課】イザヤ書 62章1~5節

- 1 シオンのために、わたしは決して口を閉ざさず  
エルサレムのために、わたしは決して黙さない。  
彼女の正しさが光と輝き出で  
彼女の救いが松明のように燃え上がるまで。
- 2 諸国の民はあなたの正しさを見  
王はすべて、あなたの栄光を仰ぐ。  
主の口が定めた新しい名をもって  
あなたは呼ばれるであろう。
- 3 あなたは主の御手の中で輝かしい冠となり  
あなたの神の御手の中で王冠となる。
- 4 あなたは再び「捨てられた女」と  
呼ばれることなく  
あなたの土地は再び「荒廢」と  
呼ばれることはない。  
あなたは「望まれるもの」と呼ばれ  
あなたの土地は「夫を持つもの」と呼ばれる。  
主があなたを望まれ  
あなたの土地は夫を得るからである。
- 5 若者がおとめをめとるように  
あなたを再建される方があなたをめとり  
花婿が花嫁を喜びとするように  
あなたの神はあなたを喜びとされる。

## 【使徒書日課】ヨハネの黙示録 3章14~22節

<sup>14</sup>ラオディキアにある教会の天使にこう書き送れ。『アーメンである方、誠実で真実な証人、神に創造された万物の源である方が、次のように言われる。<sup>15</sup>「わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。<sup>16</sup>熱くもなく冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。<sup>17</sup>あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。<sup>18</sup>そこで、あなたに勧める。裕福になるように、火で精錬された金をわたしから買うがよい。裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、また、見えるようになるために、目に塗る薬を買いがよい。<sup>19</sup>わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。だから、熱心に努めよ。悔い改めよ。<sup>20</sup>見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。<sup>21</sup>勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じよう

に。<sup>22</sup>耳ある者は、「霊」が諸教会に告げることを聞くがよい。』』

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 21章15~25節

<sup>15</sup>食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。<sup>16</sup>二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。<sup>17</sup>三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。<sup>18</sup>はつきり言っておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」<sup>19</sup>ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。

<sup>20</sup>ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのが見えた。この弟子は、あの夕食のとき、イエスの胸もとに寄りかかったまま、「主よ、裏切るのはだれですか」と言った人である。<sup>21</sup>ペトロは彼を見て、「主よ、この人はどうなるのでしょうか」と言った。<sup>22</sup>イエスは言われた。「わたしの来るときまで彼が活着していることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい。」<sup>23</sup>それで、この弟子は死なないといううわさが兄弟たちの間に広まった。しかし、イエスは、彼は死なないと言われたのではない。ただ、「わたしの来るときまで彼が活着していることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか」と言われたのである。

<sup>24</sup>これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。わたしたちは、彼の証しが真実であることを知っている。<sup>25</sup>イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書き書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## イザヤ書 62章1～5節

- <sup>1</sup> シオンのために、私は口を閉ざさず  
エルサレムのために、私は沈黙しない。  
その義が光のように現れ  
救いが松明のように燃えるまで。
- <sup>2</sup> 国々はあなたの義を見  
王は皆、あなたの栄光を見る。  
あなたは、主の口が定める新しい名で呼ばれる。
- <sup>3</sup> あなたは主の手の中で誉れある冠となり  
神の手のひらの上で王冠となる。
- <sup>4</sup> あなたは二度と「捨てられた女」と  
言われることはなく  
その土地は二度と「荒廃した地」と  
言われることはない。  
あなたは「私の喜びは彼女にある」と呼ばれ  
その土地は「夫を持つ者」と呼ばれる。  
主の喜びがあなたにあり  
あなたの土地は夫を得るからである。
- <sup>5</sup> 若者がおとめの夫となるように  
あなたの子らがあなたの夫となり  
花婿が花嫁を喜びとするように  
あなたの神はあなたを喜びとされる。

## ヨハネの黙示録 3章14～22節

<sup>14</sup> ラオディキアにある教会の天使に、こう書き送れ。『アーメンである方、忠実で真実な証人、神に造られたものの源である方が、こう言われる。  
<sup>15</sup> 「私はあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。<sup>16</sup> 熱くもなく冷たくもなく、生温いので、私はあなたを口から吐き出そう。<sup>17</sup> あなたは、『私は裕福で、満ち足りており、何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。<sup>18</sup> そこで、あなたに勧める。豊かになるように、火で精錬された金を私から買うがよい。自分の裸の恥をさらさないように、身にまとう白い衣を買い、また、見えるようになるために目に塗る薬を買うがよい。<sup>19</sup> 私は愛する者を責め、鍛錬する。それゆえ、熱心であれ、そして悔い改めよ。<sup>20</sup> 見よ、私は戸口に立って、扉を叩いている。もし誰かが、私の声を聞いて扉を開くならば、私は中に入って、その人と共に食事をし、彼もまた私と共に食事をするであろう。<sup>21</sup> 勝利を得る者を、私の座に共に着かせよう。私が勝利し、私の父と共に玉座に着いたのと同じように。  
<sup>22</sup> 耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。』』」

## ヨハネによる福音書 21章15～25節

<sup>15</sup> 食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、あなたはこの人たち以上に私を愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、私があなただを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「私の小羊を飼いなさい」と言われた。<sup>16</sup> 二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、私を愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、私があなただを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「私の羊の世話をしなさい」と言われた。<sup>17</sup> 三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、私を愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「私を愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。私があなただを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「私の羊を飼いなさい。<sup>18</sup> よくよく言うておく。あなたは、若い時は、自分で帯を締め、行きたい所へ行っていた。しかし、年を取ると、両手を広げ、他の人に帯を締められ、行きたくない所へ連れて行かれる。」<sup>19</sup> ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すことになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「私に従いなさい」と言われた。

<sup>20</sup> ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子が付いて来るのを見た。この弟子は、あの夕食のとき、イエスの胸元に寄りかかったまま、「主よ、あなたを裏切るのは誰ですか」と言った人である。<sup>21</sup> ペトロは彼を見て、「主よ、この人はどうなるのでしょうか」と言った。<sup>22</sup> イエスは言われた。「私の来るときまで彼が活着していることを、私が望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは、私に従いなさい。」<sup>23</sup> それで、この弟子は死なないという噂がきょうだいたちの間に広まった。しかし、イエスは、彼は死なないと言われたのではない。ただ、「私の来るときまで、彼が活着していることを、私が望んだとしても、あなたに何の関係があるか」と言われたのである。

<sup>24</sup> これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。私たちは、彼の証しが真実であることを知っている。

<sup>25</sup> イエスのなさったことは、このほかに、まだまだたくさんある。私は思う。もしそれらを一つ一つを書き記すならば、世界もその書かれた書物を取めきれないであろう。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・4月21日「復活節第4主日」の日課主題は「弟子への委託」。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、シオンの再建を告げる預言の箇所。使徒書日課は、「ヨハネの黙示録」から、ラオディキアにある教会に宛てた手紙の箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、復活顕現説話の第三幕第二場を描く福音書巻末の箇所。

**旧約日課(イザヤ 62 章より)**

・「イザヤ書」については、前週資料「聖書と祈りの会 240410」も参照。日課箇所は、前週旧約聖書日課に続く次章の冒頭部分。

・日課箇所は、「シオンの回復」を告げる預言として知られる。第二イザヤ(40章以下)には、同様の「シオン」の救いを告げる預言章句が繰り返し現れる。「シオン」は、元来、「エルサレム」の中でソロモンによって神殿が建てられたとされる丘を指す地名であるが、「エルサレム」とほぼ同義で用いられるほか、「エルサレム」同様に擬人化されて「ユダ(王国)」の人々を指しても用いられている例が少なくない。「ユダ」と「イスラエル」を同一視しようとする「第二イザヤ」では、広義に「イスラエル」を指していると解される場合もある。

・「イザヤ書」の解釈において、「シオン」「エルサレム」「ユダ」「イスラエル」「ヤコブ」などの用語が指すものが何であるかを判別していくことは必須である。歴史的預言者イザヤの文脈(1~39章)では、彼が北王国イスラエルが滅亡し、南王国ユダも存亡の危機にあるという時代背景に活動した預言者であるという前提で解すれば、基本的に「イスラエル」や「ヤコブ」が「北王国イスラエル」を指していることは明白であり、「エフライム」や「サマリア」も同義的に用いられていることがわかる。また、「シオン」、「エルサレム」、「ユダ」などは「南王国ユダ」を指すことは明白である。これに対して、「第二イザヤ」(40章以下)の文脈では、これらの区分が崩されており、多くの場合、「イスラエル」や「ヤコブ」が「ユダ」や「エルサレム」、「シオン」と同義的に用いられているとみなされるが、それが預言句元来の意図であったのかは判然としない。つまり、①ヨシヤ王時代から展開したと推測される「ユダ=エルサレム(シオン)」を中心とした「大イスラエル主義」を是とする立場で、「イスラエル」や「ヤコブ」は「ユダ=エルサレム(シオン)」に同化されているのか、②「北王国イスラエル」の残渣を独自のものとして認める立場で「イスラエル」や「ヤコブ」に関して告げられていた預言が、後に「ユダ=エルサレム(シオン)」に関して告げられた預言と一体化されたために、両者が同義的に解されるようになっているのか、判然としない。

・2節「主の口が定めた新しい名」は、本預言書内では明示されない。

・4節の比喻は、「ホセア書」2章に類似する。

**使徒書日課(黙示録3章)**

・「ヨハネの黙示録」は、「僕ヨハネ」の名によって「イエス・キリストの黙示」(1:1)の標題でまとめられた「預言(プロフェーティア)」(1:3)の書。標題となっている「黙示」の原語は「アポカリュプシス」で、「パウロ書簡集」で多用され「啓示」または「現れ」と訳されるのが通例の用語。「黙示」の訳語は、本書や「ダニエル書」、「エゼキエル書」などに共通する文学様式を「黙示文学(英語では apocalyptic literature)」と称してきたことによる。なお、英語で「啓示」は通常「リヴェレイション revelation」で表し、「黙示」の意味の場合のみギリシア語を音訳した「アポカリュプス apocalypse」を用いる。

・本書は、「黙示文学」の様式で記されていることばかりに注目されがちであるが、実際には、「黙示文学」様式ではない大部(2~3章)を含む。これは「七つの教会に宛てた七つの手紙」として構成されており、4章以下の「黙示文学」様式著しい部分とは、編集上は一体化されているとしても、明らかに区別される。これらの「七つの手紙」は構成や様式に統一が見られ、元来個々に独立した書簡として宛先教会に届けられたものではなく、全体が一体的に著されたものと考えられる。とは言え、これが書簡として実際に名の挙げられている七つの教会に宛てて届けられたものではなかった、とは言えない。これらの七つの教会については、本書冒頭から具体的に「アジア州にある七つの教会」(1:4)、「エフェソ、スミルナ、ベルガモン、ティアテイラ、サルデイス、フィラデルフィア、ラオディキアの七つの教会」(1:11)と挙げられており、少なくとも本書がこれらの教会に宛てた文書としてまとめられたものであることを示している。

・「アジア州」の中心は港湾都市「エフェソ」で、すでに紀元前6000年紀には人の居住が始まり、前8世紀以降のギリシアの「都市国家(ポリス)」の一つとして発展した。このエフェソから内陸に150キロほど入った地に「ラオディキア」がある。ラオディキアは、セレウコス朝シリア王アンティオコスII世(在位=前261~246年頃)が再建して命名した都市で、それ以前の歴史的記録はほとんど知られていない。しかし、この年から10キロほどの距離にある「コロサイ」は、古代ギリシアの歴史家らが毛織物業で知られる「大都市」として伝えており、「コロサイ」を補完するような役割を担っていたと考えられる。この両都市のつながりは、パウロの「コロサイの信徒への手紙」(4:13~16)にも見られる。パウロは、エフェソを拠点に活動していた時期があったことが伝えられており(使徒19章)、アジア州諸都市の教会との結びつきや影響が推認される。他方、教会伝承は「エフェソ」の教会指導者として「使徒ヨハネ」を伝えており、この地域の教会は、「ヨハネの教会共同体」の存在と切り離して考えることができない。しかし、本書(黙示録)は、「ヨハネ文書」(福音書、手紙一、二、三)とは様式も内容も大きく異なる。

## 福音書日課(ヨハネ 21 章より)

・日課箇所は、「ヨハネ福音書」が「復活顕現伝承説話」の第三幕として置いた「ティベリアス湖畔での復活顕現」に付随する逸話として描かれている。「ヨハネ福音書」における「復活顕現伝承説話」第三幕は、第一幕(20:1~18)および第二幕(20:19~29)とは明らかに区別される様式や内容で構成されている。

・第三幕(21 章)の第一幕や第二幕との明らかな違いは、ペトロの取り扱いに見られる。元来、いずれの福音書においても「復活顕現伝承説話」におけるペトロの役割は限定的で、女の弟子たちの報告する「空の墓」をペトロが確かめに行ったことを「ルカ」と「ヨハネ」が伝える程度である。「ヨハネ」は、「復活顕現」が「弟子たち」の集団によって経験されたことであることを「マタイ」や「ルカ」と同様に伝えるが、中でも「マグダラのマリア」や「トマス」の逸話を詳細に描いている。また「ヨハネ」は、第一幕で「空の墓」を確かめに行ったペトロに「もう一人の弟子」が同行したことも加えて描いている。この「もう一人の弟子」と同一人物かは不明であるが、ペトロが逮捕された主イエスを追って大祭司の屋敷に入ったときにも、大祭司と懇意であったという「もう一人の弟子」が同行したとされている(ヨハネ 18:15)。日課箇所(第三幕第二場)は、この「ペトロ」の全教会的な位置づけを認めるものとなっており、「もう一人の弟子」との違いを明らかにしているとみられる。

・ペトロの主イエスとの三度繰り返されるやりとりでは、「愛する」が鍵語となっているが、原語は二つの語、「アガパオー」と「フィレオー」が使い分けられている。主イエスの最初と二度目の問いは「アガパオー」が、三度目とペトロの三度の応答はすべて「フィレオー」。「アガパオー／アガペー」は一般的な意味での「愛する」を、「フィレオー／フィリア」は友愛的な「愛する」を意味するとされる。「ヨハネ文書」の研究者の多くは、両語に意味の違いはないとみますが、使い分けの意図を説明できていない。

## 来週の誕生日 (4月21日~27日)

## 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-323 番「喜び祝え、わが心よ」(= I 153)は17世紀ドイツの代表的な讃美歌作家パウル・ゲアハルトと、同じく代表的な作曲家ヨハン・クリューガーのコンビによる讃美歌の一つ。17世紀のドイツ讃美歌の特徴は、内面的信仰を歌う「歌による信仰告白」。
- ・21-487 番「イエス、イエス」は、20世紀スコットランド教会で按手を受けアフリカ宣教に従事した宣教師 T.S.コルヴァンが現地信徒ら自身に伝統音楽に基づいて創作させた讃美歌集『*Fill Us With Your Love*』に収録された讃美歌の一つ。「主の洗足」の記事に基づいて主の愛に従う道を歌う。
- ・21-568 番「朝日はのぼり」は、20世紀英国教会司祭で神学者の W.H.ヴァンストーンが作詞、米国の教会音楽家 D.H.シーツが作曲。

## 21-323「喜び祝え、わが心よ」

## Auf, auf mein Herz, mit Freuden

1. Auf, auf, mein Herz, / mit Freuden nimm wahr, / was heut geschieht; / wie kommt nach großem Leiden / nun ein so großes Licht! / Mein Heiland war gelegt / da, wo man uns hinträgt, / wenn von uns unser Geist / gen Himmel ist gereist.
2. Er war ins Grab gesenket, / der Feind trieb groß Geschrei; / eh er's vermeint und denket, / ist Christus wieder frei / und ruft [Viktoria], / schwingt fröhlich hier und da / sein Fähnlein als ein Held, / der Feld und Mut behält.
3. Das ist mir anzuschauen / ein rechtes Freudenspiel; / nun soll mir nicht mehr grauen / vor allem, was mir will entnehmen meinen Mut / zusamt dem edlen Gut, / so mir durch Jesus Christ / aus Lieb erworben ist.
4. Die Welt ist mir ein Lachen / mit ihrem großen Zorn; sie zürnt und kann nichts / machen, all Arbeit ist verlor'n. Die Trübsal trübt mir nicht / mein Herz und Angesicht; das Unglück ist mein Glück, / die Nacht mein Sonnenblick.
5. Ich hang und bleib auch hangen / an Christus als ein Glied; / wo mein Haupt durch ist gängen, / da nimmt er mich auch mit. / Er reißet durch den Tod, / durch Welt, durch Sünd, durch Not, / er reißet durch die Höll; / ich bin stets sein Gesell.
6. Er dringt zum Saal der Ehren, / ich folg ihm immer nach und darf mich gar nicht kehren / an einzig Ungemach. Es tobe, was da kann, / mein Haupt nimmt sich mein an, mein Heiland ist mein Schild, / der alles Toben stillt.
7. Er bringt mich an die Pforten, / die in den Himmel führt, daran mit güldnen Worten / der Reim gelesen wird: Wer dort wird mit verhöhnt, / wird hier auch mit gekrönt; wer dort mit sterben geht, / wird hier auch mit erhöht.

## 21-487「イエス、イエス」

## Jesus, Jesus, Fill Us with Your Love

Refrain: Jesu, Jesu, fill us with your love, / show us how to serve / the neighbors we have from you.

1. Kneels at the feet of his friends, / Silently washes their feet, / Master who pours out himself for them.
2. Neighbors are wealthy and poor, / Varied in color and race, / Neighbors are nearby and far away.
3. These are the ones we should serve, / These are the ones we should love: / All these are neighbors to us and you.
4. Kneel at the feet of our friends, / Silently washing their feet: / This is the way we should live with you.

## 21-568「朝日は昇り」

## Morning Glory, Starlit Sky

1. Morning glory, starlit sky, / Soaring music, scholar's truth, / Flight of swallows, autumn leaves, / Memory's treasure, grace of youth:
2. Open are the gifts of God, / Gifts of love to mind and sense; / Hidden is love's agony, / Love's endeavour, love's expense
3. Love that gives, gives evermore, / Gives with zeal, with eager hands, / Spares not, keeps not, all outpours, / Ventures all, its all expends.
4. Drained is love in making full, / Bound in setting others free, / Poor in making many rich, / Weak in giving power to be.
5. Therefore he who shows us God / Helpless hangs upon the tree; / And the nails and crown of thorns / Tell of what God's love must be.
6. Here is God, no monarch he, / Throned in easy state to reign; / Here is God, whose arms of love, / Aching, spent, the world sustain.